

キリスト教文化研究所主催（共催 宮城学院 女子大学社会連携センター，一般教育部） 公開講演会「悲しみへの寄り添いと癒し ～音楽の恵み」報告

松 本 周

2023年3月12日曜日、午後2時30分～4時30分に仙台市福祉プラザホールを会場として、キャロル・サック氏をお迎えした公開講演会「悲しみへの寄り添いと癒し～音楽の恵み」が開催された。

本講演会の開催へ至る経緯として、キリスト教文化研究所活動で「グリーフケア研究」が実施されていることが挙げられる。2011年の東日本大震災は東北に甚大な被害をもたらし、その影響は現在に至るまで引き続けている。そこには多くの深い傷がある。その痛みにも少しでも寄り添うことができるのだろうか。そうした問いを抱えつつ、宮城学院女子大学ではさまざまな実践や研究が積み重ねられてきた。そして2022年度からはキリスト教文化研究所のプロジェクトとしてグリーフケア研究が始まった。2022年10月26日（水）、「悲しみを語り伝えるために 旧約聖書にみる語り部の格闘」と題して、青山学院大学教授の左近豊氏にお話しいただいた（一般社団法人キリスト教学校教育同盟の研究助成）。また、阪神淡路大震災でご家族を亡くされ、現在は医師として活躍されている尹玲花氏を11月18日（金）に迎えてお話を伺った。なおグリーフケア研究は2023年度も継続され、2023年11月24日（金）に同志社女子大学教授の山下智子氏に「愛する人の死と新島八重 ―キリストの心を心とせよ―」と題して講演いただいた。こうしたグリー

フケア研究活動の一環として、学内での研究会だけでなく、学外で地域の方にも広くご案内する形で公開講演会を企画し開催することとなった。それが本報告における講演会である。

今回、講師を務めてくださったキャロル氏はアメリカ福音ルーテル教会の宣教師として1982年に来日した。その後2000～2002年に米国で音楽による死の看取りについて学び、「音楽死生学士」の認定を受けて日本に戻った。2006年から、日本福音ルーテル社団が主催し、音楽死生学の学びにキャロル氏独自の要素を加えて発展させた「リラ・プレカリア 祈りのたて琴」を立ち上げ、2018年までの同活動において多くの修了生が巣立った。キャロル氏の活動は、映画「おとうと」における本人出演場面、またNHK「こころの時代」でも紹介されている。

公開講演会のプログラムでは、第一部「人生の最期に寄り添う豎琴」と題してキャロル氏により、上述の「リラ・プレカリア 祈りのたて琴」活動の実践につながっていく、聖書の思想、またキリスト教史における修道士たちのターミナルケア活動内容とそれを支えた思想について紹介された。その中で豎琴の音色の持つ特色や、それがスピリチュアルペインを抱えている方への癒しとなる理由について語られた。ハーブの音色を聴いている方が、聴き手として受動的であるように見えつつ、しかし実は指揮者としてたて琴を奏でる者の演奏をリードしていくという神秘的な世界の出現について、実際のエピソードを交えながら紹介された。また講演の最後にはキャロル氏が実際に豎琴を演奏しつつ、来場者皆が目を閉じ沈黙のうちに音色へ耳を傾けることを通して、祈りの豎琴の世界を全身で体験した。

また第二部では「いのちを運ぶ息と音」と題して、サック氏と本学の大内典教授との対談が行われた。大内教授は音楽文化学が専門で、日本仏教における声の役割について実践も伴う研究活動を継続している。両名はサック氏がキリスト教を背景とした臨床実践、大内氏が仏教実践をふまえた研究であ

キリスト教文化研究所主催（共催 宮城学院女子大学社会連携センター、
一般教育部）公開講演会「悲しみへの寄り添いと癒し～音楽の恵み」報告

りつつ、その二つが交叉する場である人間のいのちの本性にある呼吸、そして人間存在が互いに呼応する場である声について、深い洞察と相互理解を伴った対談が展開された。参加者の声の中には、この対談の時間をより充実させてほしかった、続編の機会を期待するとの言葉も聞かれた。

当日は学内外から 120 名近い参加者が集った。仙台ではまだまだ冬の寒さが残る日であったが、期せずして開催日が 3 月 11 日の東日本大震災を覚える翌日であったことも、本講演会でのメッセージが、この地で語られた意義を大きく受け止めることとなった。「河北新報」紙面で開催予定を記事にいただいたことにより、掲載直後に多くのお問い合わせ・申し込みをいただき、受付電話が終日鳴りっ放しになるという反響は企画者としても驚きであった。それと共にご迷惑をおかけした各位にこの場を借りてお詫び申し上げます。

なお本公開講演会は宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所の主催と共に、本学社会連携センターおよび一般教育部の共催、後援を仙台市社会福祉協議会様と本学音楽リエゾンセンターと宮城学院同窓会より受け、会場運営等について本学学生生活動団体の YWCA に協力いただいた。大学所在地の社会福祉協議会にお支えいただき、またオール宮城学院とでもいえるような多くの方々の尽力により公開講演会を実施することができた。深く御礼申し上げる次第である。